

権現山古墳群

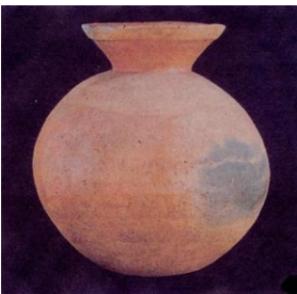
■ここ**権現山古墳群**は、武蔵野台地が新河岸川と接する崖の上の見晴らしのよい場所に造られた小規模な古墳12基からなる古墳群です。

造られた年代は約1700年前の**古墳時代前期**であり、この時期のものは**現存するものが少ない**ことから貴重な史跡として**埼玉県指定史跡**となっています。

■古墳群は2種類の古墳で形成されています。ひとつは**方墳**という四角形をしたもので、もうひとつは**前方後方墳**という大小2つの四角形をつなげたような形のもので、権現山のそれは前方部の長さが短く、盛り土が低く扇のように開く初期古墳の特徴を示しています。

方墳群の中に少数の前方後方墳が混在しているのがこの時期の特徴とされており、首長的な人物の墓と考えられています。

■前方後方墳である2号墳、方墳である7号墳から、底にわざと穴をあけた土器（**底部穿孔土器**）などが発掘されました。葬送儀礼に使われた土器で、後に埴輪に発展する前の段階のものと考えられています。



底に穴をあけた土器

■調査では古墳とともに住居跡が確認され、はじめ高台に住んでいた人々はやがて低い土地に住居を移し、高台には墳墓を造るようになったことが判明しています。当時の人々の社会に大きな変化があったことがうかがえます。

徳川家康と権現山

■古墳はいつしか人々から忘れられていき、高台の土地は草原や森となっていました。古墳の盛土はなだらかになりながらもその形をとどめ、今から約400年前頃には、権現山のあたりは樹木の少ない高台にいくつもの塚があり、新河岸川沿いの平原を見下ろせるような風景であったと思われます。

■地元にはある言い伝えが残っています。それは「この地に鷹狩に来た徳川家康が高台の塚の上で**休息した**」というものです。

鷹狩とは領主の娯楽で、飼慣らした鷹を用いて鳥を捕る狩猟です。家臣を動員し鳥追いをさせることに軍事演習の意味もあるので、自分の領地で盛んに行いました。

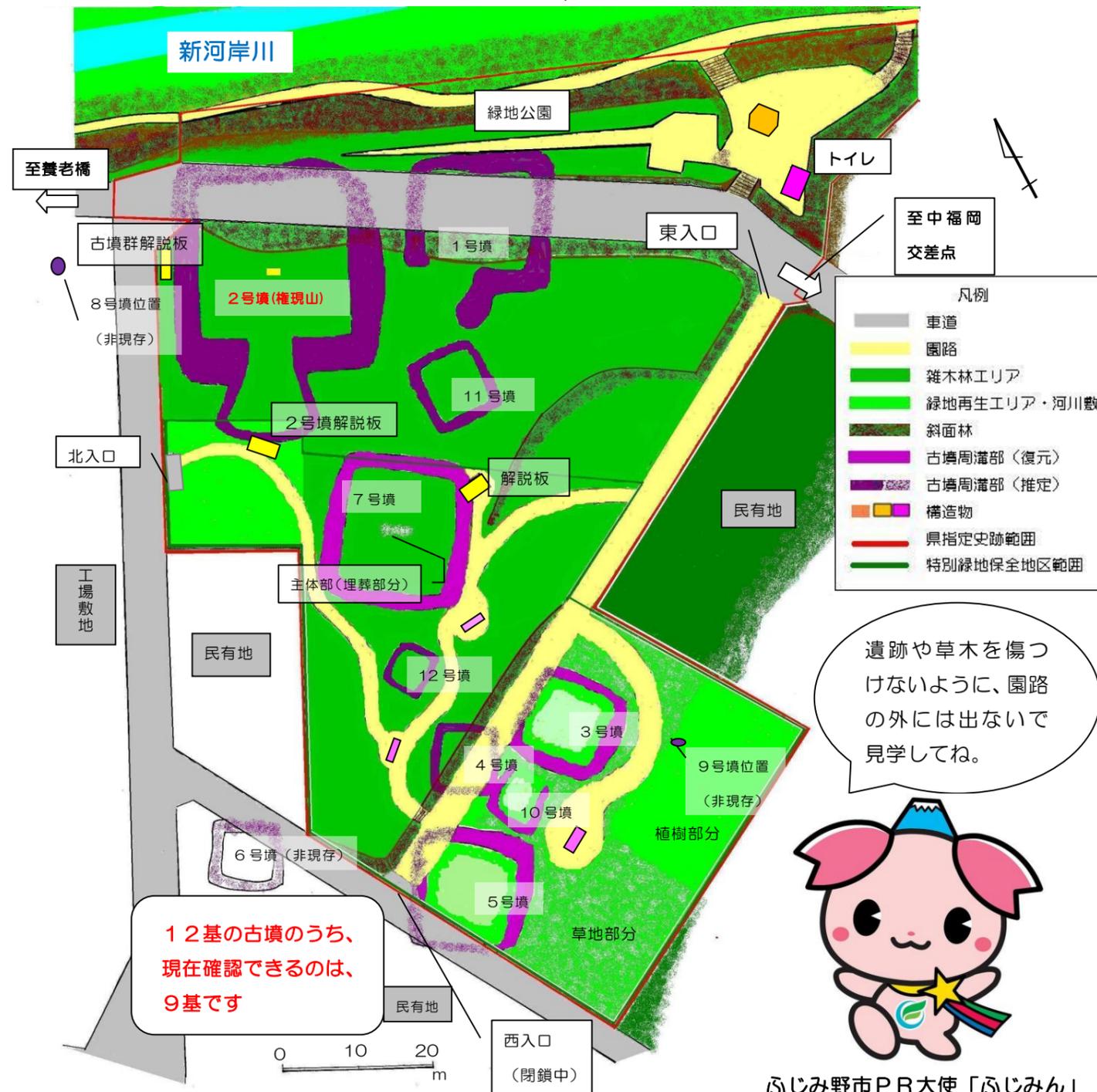
1590年に江戸に領地を移した家康も関東周辺で度々行っており、ふじみ野市近隣にも訪れています。新河岸川対岸の蓮光寺（川越市）にはその際の朱印状が残っています。



「まんが上福岡の歴史」より

■家康が休息したとされる塚とは、**権現山古墳群のなかで最も大きな2号墳**でした。家康も自分が腰を下ろした小山が古墳だとは思わなかったことでしょう。

権現山とは家康が「**東照大権現**」という神号でよばれることから土地の人々が名付けたものです。2号墳の頂上には今も江戸時代の末に建てられた石碑が残されています。



12基の古墳のうち、
現在確認できるのは、
9基です



ふじみ野市PR大使「ふじみん」